

## 「越州鯖江嚮陽溪真景」考

竹内信夫

### はじめに

吉田郡長や丹生郡長・今立郡長・遠敷郡長などを歴任した近藤直一<sup>①</sup>（嘉永四年十二月生れ）が作した「嚮陽溪の図を見て感有り」と題される詩歌がのこる。以下に示す史料（一）<sup>②</sup>がそれである。

#### ◎史料（一）

庚子の初夏、青柳々涯を伴ひ、嚮陽溪の跡に遊ぶ。聞説らく嚮陽溪とは、旧鯖江侯の遊園なり。当時の風流の韻士、その景を尋ね、詩において歌において、吟詠唱和するもの、一に足らず。其の詩歌の伝へて今に至る者有りと雖も、園景荒涼として、更に其の看るべきもの無し。纔かに斯の図に従り之をつくすのみ、ああ惜しいかな。梅塙識<sup>④</sup>す

つまり、史料（一）によれば、「このころの嚮陽溪は、風景も荒涼とし、いよいよ見るべきものがない、僅かに、この嚮陽溪の図に

よつてこれを細かく知ることが出来るだけである、たいへん残念である」と記されているのである。

ここに記される「嚮陽溪の図」とは、江戸時代末期の浮世絵師（初代）歌川広重によつて描かれた浮世絵風景画「越州鯖江嚮陽溪真景」のことと思われる。この浮世絵風景画「越州鯖江嚮陽溪真景」の図は、版木も現存し<sup>⑤</sup>、開園当時の鯖江嚮陽溪の景観を描いたものとして貴重な歴史資料となっている。このように、浮世絵風景画「越州鯖江嚮陽溪真景」は貴重な歴史資料であるにも拘わらず、嚮陽溪そのものや、また嚮陽溪の絵画についての論考などは皆無であるといつて過言ではない。

そこで、本稿では嚮陽溪の成立、景観、そして浮世絵風景画「越州鯖江嚮陽溪真景」の図について若干調べたところを述べようとするものである。

## 一 「越州鯖江嚮陽溪」の成立

### 一 「与衆同楽」をどのように考えるか

「越州鯖江嚮陽溪」とは、安政三年（一八五六）春、鯖江藩七代藩主間部詮勝が、鯖江台地の西北に連なる長泉寺山一面を領民の憩いの場となるように庭園としたものを「嚮陽溪」と命名したのが、その前身である。「嚮陽溪」の「嚮陽」の意味は「陽に向って」の意があるという。

「嚮陽溪」のあった「長泉寺山」とは、近世の地誌『鯖江誌』<sup>6</sup>によれば、「西北、鯖江の地に連なるは、長泉寺山となす、詩家は長白山と称するは、泉より水を去るなり。山ははなはだ高からず。平野に蹠踞す、山趾陵遲、西北の隅に連帯す。鬱蒼深秀、鯖江藩屏と謂うべき矣」とある。つまり、鯖江の西北に「長泉寺山」と称される山があり、詩家からは長白山と呼ばれていた。それは「泉より水を去るなり」であるとし、その山一帯は「草木が茂り、山が高くそびえ、鯖江藩屏と謂うべきである」と記されているが、間部詮勝は、その長泉寺山一面に庭園を開園したのである。しかし、果たして、こうした山々のなかに庭園を築くことができたのであろうか。

それはともかく、詮勝は、ここに庭園を築き、その庭園の開園にあたり、詮勝は詩歌を作成していることはよく知られている。詩歌の表題は「嚮陽溪」と題されるもので、史料（二）がそれである。

### ◎史料（二）

披林聴鳥 隔水賞花 吟詩製画 酌酒煎茶  
 調音不妨 扞友須約 非独忘憂 与衆同楽  
 安政三年丙辰暮春 常尼<sup>（間部詮勝）</sup>齊主人 識

というものである。詩歌の全体の大意は、嚮陽溪を開き、領民とともに春秋の自然に接し、「与衆同楽」、つまり「衆と楽しみを同じくする」ために、この嚮陽溪を拓く、というような意味である。<sup>7</sup>「嚮陽溪」の詩歌の最後の部分、「与衆同楽」とある部分が、この詩では最も重要な部分になるであろう。そこには、詮勝が嚮陽溪を開園する際の基本理念を読み取ることができるからである。

この「与衆同楽」をどのように考えるか、これにはさまざまな解があるが、そもそも「与衆同楽」という考え方は、儒教の精神、考え方から出たもので、たとえば孟子などは「古の人は民と偕に<sup>（8）</sup>楽しむ」と述べている。つまり、「古の賢者は、自分ひとりだけの欲求を求めず、民と楽しみを共にしようとつとめるならば、国はよく治まり、王者となれることは、たやすいことであろう」というような考え方である。

その考え方を実践したのが、江戸幕府八代將軍徳川吉宗と水戸偕楽園を造営した水戸藩九代藩主水戸斉昭とされている。あまり知られていないことであるが、東京北区王子一丁目に、徳川吉宗が開園した桜の名所「飛鳥山<sup>（あすか）</sup>」がある。吉宗は享保五年（一七二〇）、この地に桜の苗木を二七〇本、翌六年に更に千本を植え付け、飛鳥山を庶民行楽の地とすることを計画している。つまり、吉宗は緑の深い

飛鳥山を選んで桜を植樹し、江戸庶民のための行楽の地としたわけである。しかし、庶民は（吉宗に）遠慮して、花見に来る者がなかったので、吉宗は「衆と共に楽しむ意に応せず」（飛鳥山碑始末）として、飛鳥山に隣接する王子権現の別当金輪院にこの地を寄進したという。しかし、吉宗が飛鳥山の桜に関し、「衆と共に楽しむ」、「民と楽をとみにす」という意向を有していたことは、たいへん重要なことである<sup>9</sup>。

一方、水戸の偕楽園は天保十三年（一八四二）七月、水戸藩九代藩主徳川斉昭が開園した庭園で、現在は「日本三名園」の一つとされ、桜の公園として知られている。その偕楽園造営の趣意を斉昭みずから書きあらわしたのが「偕楽園記碑文」であるが、その「偕楽園記碑文」に「是れ（偕楽園の開園のこと）余が衆と楽を同じくするの意なり。因てこれに命じて、偕楽園と曰ふ」とある<sup>10</sup>。つまり偕楽園造園の趣旨は、「衆と楽しみを同じくする趣旨で造園するものである」、としている。詮勝も吉宗の「衆と共に楽しむ」、「民と楽をとみにす」という思想、また水戸斉昭の「衆と楽しみを同じくする」という趣旨を理解し、「与衆同楽」という言葉を嚮陽溪の開園の理念としたのであろうか。

それでは鯖江の嚮陽溪が実際、庶民にどのように親しまれていたかみておきたいと思う。次に引用する史料（二三）は、岡田健彦家文書「天文日記 二」である<sup>11</sup>。日記の表題からみると中世の日記のような印象があるが、「天文日記 二」は、当時上梅浦の村役人をして岡田茂十郎が記した日記で、内容としては、安政三年

（二八五六）一月から同七年（万延元年）までの記録である。多分、「天文日記 一」も作成されていたと考えられている。以下に記載するのは、茂十郎が開園まもない嚮陽溪を見物した時の記事で、安政三年五月の記録である。

◎史料（二三）

月燭楼へ行、嚮陽溪へ遊参（中略）嚮陽溪ハ鯖江ノ乾ニ当テ、長白山ノ西也、当三月、問部公ノ御開地被遊、山上ニハ東屋有。御筆ノ額ニ春秋奇観ト有。又書画毛色々カ、レリ。東ニソリ橋有テ、茶店八九軒、三十三番ノ観音堂アンチス。毎日、文人・墨客詩吟、又娼妓ノ三弦越山、第一ノ奇観也。御筆ニテ石碑ニ刻メリ（以下略）

冒頭にみえる「月燭楼」とは、茂十郎の鯖江における定宿である。茂十郎によれば、嚮陽溪は「鯖江の西北（乾）、長白山（長泉寺山）の西にあり、安政三年三月、問部詮勝が開いた」とし、そして「毎日、文人・墨客詩吟、又娼妓ノ三弦越山、第一ノ奇観也」とあるように、毎日、文化人はじめ書や絵をたしなむ人、また詩吟をする人、音楽をする人が訪れ、三弦（琵琶や和琴、箏）の音色が響きわたり、そこは「第一ノ奇観也」つまり、たいへん珍しい風景、雰囲気であると記されている。当時の景観を解するには、貴重な記録と考える。つぎの史料（四）は、詮勝が嚮陽溪の開園にあたり、嫡男問部詮實に送った書状である<sup>12</sup>。

◎史料（四）

鯖江住居北西之方ニ山有之、此之地、風景宜処ニ付、此度、嚮陽

溪と碑銘相立、銘文之儀ハ未縮図出来不申、追而懸御目候、書画詩文等懸候処、出来。衆人入込候様申付候処、日々遊人百を以数算候程罷出、鯖江町家寂寞之処、此節、急三賑々敷相成候とある。つまり嚮陽溪の完成により、「毎日百人余の出入があり、鯖江町が急に賑やかになった」と記され、嚮陽溪が庶民にも愛好されている様子、また、詮勝の考えた「与衆同楽」の精神が開花していった様子が伺えるのである。

嚮陽溪には桜や楓などの樹木が植えられていたとされている。これらの樹木がどのように植え付けられたか、その時期はわかっていない。桜の樹木については、早くから植栽されていたものと考えられるが、幕末、文久三年（一八六三）の「鯖江藩日記」に、宇野初右衛門という武士が「嚮陽溪桜苗植込場所見廻り等骨折候二付遣之」とあり、その際、宇野に褒賞が与えられた、という記録がみえる。このことからみて、この時期には、すでに嚮陽溪に桜が植えられていたであろう。しかし、問題もみられた。それは開園直後から子どもによる嚮陽溪の桜木はじめ植木に対する悪戯が絶えなかったことである。そのため、藩では、たとえば「嚮陽溪御林へ子供立入、花之枝折取候もの有之趣相聞候二付、其御厳敷申付候趣も有之、其後同所八幡宮江御奉納之桜苗御植付相成候、右場所江不立入様親々より急度可申付旨是又申付置候」（以下略）といった触書を出し、取締りを図っている<sup>13</sup>。ほぼ同様の触書は幕末・明治まで出されていることから、原則、子どもたちは嚮陽溪に立ち入ることができなかったと思われる。春秋の自然に接し「与衆同楽」といっても、嚮陽溪の

開園から明治はじめまで、その維持管理は、なかなか困難であったようである。

史料（五）は、高田達郎家文書（「御用日記」）からの引用である。この文書は無年記の記録であるが、「嚮陽溪御開二付」とあることから、ここでは安政三年三月の記録と考えておきたい。

#### ◎史料（五）

太三右兵衛

與太兵衛

伊三太郎

重治郎

新七

庄治郎

甚兵衛

長右衛門

嘉右衛門

三月晦日

嚮陽溪御開二付、肝煎申付

この史料（五）によれば、嚮陽溪が開園されたので、太三右兵衛以下八名の者が肝煎りを申付けられたことが記されている。肝煎とは何か、任命したのは誰か、任命された人々は具体的にどのような立場の人なのか、その任務や、また、どのような観点で選ばれたか、など全くわかっていない。しかし、この記録によれば、どうやら嚮陽溪を管理する肝煎、つまり中心的人物が存在していたものと考えられるのである。

## 二 嚮陽溪の開拓

ところで、嚮陽溪の開拓は鯖江藩七代藩主間部詮勝の手によるものとされている。それでは、具体的に詮勝による嚮陽溪の開拓の実際とは、どのようなものであったか、いくつかの史料により検討しておきたい。

はじめに、史料(六)の桑原喬家所蔵<sup>15)</sup>から検討しておきたい。

### ◎史料(六)

殿様、明九日、長泉寺山より有定川原筋へ御出御座候段御沙汰有之候間、其村内掛之分掃除等之義申付、万端不都合無之様取計ひ可致候、以上

九月八日

桑原武右衛門様 御印

西鯖江村

庄屋

すなわち、詮勝は安政二年(一八五五)、参勤を終え八月七日に江戸を發し、東海道を上つてこの月二十一日鯖江に帰国しているが、史料(六)によれば、鯖江に着いた詮勝は、帰国して一か月もたたないうち、つまり、同年九月九日に長泉寺山から有定川原に出向いていたことが記されている。嚮陽溪の開拓と関連があるように思えてならない。

ついで、史料(七)の加藤新左衛門家文書<sup>17)</sup>では、詮勝が長泉寺山(御建山)の開発を命じたことを記す<sup>18)</sup>。

### ◎史料(七)

(安政三年)三月九日、御作事御役所より御用之義被仰遣候二付罷出承り候処、御普請御奉行様より被仰渡候は、先達て殿様御達山御遊山之節、板取山之場所ニ於て御覽御場所御好被為遊候二付、地ならし致候様、其御筋より被仰聞候処(以下略)、とあるが、つまり、安政三年(一八五六)三月九日には長泉寺山の開発を命じ、長泉寺山の「板取山」と呼ばれていた一帯で好ましい空間を發見し、「地ならし」を行うよう命じたところから、板取山一帯の開発を命じたのである。さらに、史料(八)加藤新左衛門家文書<sup>19)</sup>では長泉寺山の開発に關し、西鯖江村・有定村から人足を差し出すよう命じたことが記されている。

### ◎史料(八)

覚

一人足貳拾老人

西鯖江村

一人足拾六人

有定村

メ三拾七人

老人二付米三合ツ、被下

右は、今般御建山御開発被遊候付、右御山へ有定河原より石持人足書面之通被仰付候間人足付記置者也。

辰四月十二日

右人足御頼二付為焚出人足老人二米三合ツ、被下置候様、郷司松蔵様より被仰聞候、四月十一日御次御用二而(以下略)この史料(八)では、近郷の西鯖江村から二人、有定村から

一六人の人足が駆り出され、有定川原から石などが運び込まれたと記されている。開発といっても、「土持」工事といって、土や石を運ぶ簡単な工事であったと考えられる。嚮陽溪の開拓に関し『鯖江郷土誌』は、「諸大名が競って自己の庭園に万金を投じて誇る時代に、詮勝公は独り領民と共に楽しみたいとの念願から、冗費を投ぜず、自ら労役に服し、家臣と共に嚮陽溪を創設した」と記し、詮勝も自ら鋤や鋤を持ち、工事の陣頭にたった、と記されているが、このところは、やや誇張されているようにも思われる。詮勝が自ら労役に服し、家臣と共に嚮陽溪を開発したことについては、史料がなく、確認することはできない。<sup>20)</sup>

次に、史料(九)は、昭和の記録である。昭和十二年七月、鯖江青年団団長宅を会場とし「懐旧座談会」が開催され、そこで嚮陽溪の開拓が話題となり、その時の記録が鯖江青年団の『団報』(第七号)に記載されている。<sup>21)</sup>表題には、「懐旧座談会」とあって、「むかしのわかいしゅうに、ものをきくかい」とルビがつけられている。要するに、古老から昔話を聞く会で、この会は二回開催された模様である。この日の座談会の出席者は、井波五郎氏、植田命光氏、田井政権氏、田代多橋氏、窪田喜三郎氏など一三名で、その当時の文化人、郷土史家など、そうそうたるメンバーといえるのであるが、明治はじめに生まれた人々の嚮陽溪の開拓、景観についての話し合いで、なかなか興味深い内容となっている。以下にその一部を紹介しておく(原文のまま)。

### ◎史料(九)

団長 松堂さんの話の序に嚮陽溪の梅林に付いてお話し願ひます。溪は何時頃迄あったものですか。

田井 私は明治八年生ですが、十一歳の時に石を下したのを覚えてゐます。

高橋 あの石は、新庄から出たらしい。梅園は安政三年に出来たのだから、井波さんは御存知ではないですか。

井波 松林や桃林、紅白の梅林があつて七廻りと云つて、七廻りして八幡様へ詣るやうにしてあつた。そして東京からわざ／＼梅の木を移して来て、今のなんです。あま池の周りに植えさせられた。池は非常に大きく、東が中島さんの所でした。橋は東の方が赤橋で大きく、西の方は白木でした。三月になると屋形船を出して西家中の若衆が三味線を弾いたり、士族の若者が踊つて、仲々盛んだつた。

(中略)

団長 西山の造られたのは何時頃でしたか。

井波 私はよく知りませんが。

木村 松堂さんが嘉永十一年に老中を水野越前守に譲られて、十五年遊んで、又老中になられた。その十五年遊んでおられた間に作られた。私の親は自分が見てきたように云つてゐましたが、山に用ひる石などは新庄の三田村八高さんの所で見立て、は取つて来られ、山へ上げるには、鉢巻をし、木遣音頭で町民に上げさせ、上で殿様が御覽

になって居り、祝に囃方などもやり、町民は皆面白く、楽しんで仕事をしたさうです。

田代 何んでも、土木費を余りかけずに仕上げる方針で、藩士が土木の方を行った。今の石碑なんかも彫刻は素人が刻んだらしい。

木村 それで商人も皆が出て、手伝ったさうです。

田代 それを壊したのは実に惜しいし、広重の木版のやうなのが あつたと思はれます。

(後略)

『団報』には以上のように記されている。嚮陽溪の開発に關して、今日の私達には知らないことも記されており、参考になるものと考ええる。

明治以降、つまり近代の嚮陽溪の歴史について述べておきたい。維新期の動乱から、その後の廢藩置県により、鯖江の街も大きな変容をとげることになる。とくに士族の離散は都市の衰退現象を招き、嚮陽溪も一時荒廢を余儀なくされたのである。明治二十二年二月には、町村制が施行され、鯖江町が成立し、嚮陽溪は「町立嚮陽公園」となったのであるが、前記近藤の詩歌に記されるように、公園の荒廢に歯止めをかけることはできなかったのである。

しかし、大正三年になると、大正天皇の即位記念事業、所謂「御大典記念」の事業が全国規模で実施された。この御大典記念事業は、県・郡・市町村、学校、寺社、各種団体などを主体に、たとえば、基本林の造成、植樹、道路の開墾、橋の改修、図書館や博物館の建

設、郡誌や村誌の編さん、そして公園の整備など多方面にわたって事業が計画され、実施されたのである。この時、鯖江町では、嚮陽公園の造園整備が実施され、町民総出による修復が行われている。具体的には、広場の造営、中腹東側には瓢箪池や藤棚の設置、全山に桜を植え、県下でも指折りの桜の名所となり、この頃、「西山公園」と称されたようである。

つぎの史料(一〇)は、『福井新聞<sup>22)</sup>』からの引用である。

◎史料(一〇)

鯖江における桜花の名所として親しまれてゐる嚮陽公園(通称西山)は、その昔、安政年間第八代の鯖江藩公間部詮勝によって造られた大名庭園であつたが、町が廢藩後無償譲受けて公園とし、総面積一町歩に桜樹約五百本を植樹、角力場や遊戯場なども設けてから、町民はもちろん県下各地の人々も鯖江を訪へば、一度は杖を曳くといふ由緒の地だ。然し一瞬の遊閑も許さぬ苛烈極まる戦局は、この遊園地をも戦列へと推し進めたのである。数十年を経た老松も綻ひ初むる桜樹、いま町の防空壕資財のために、また燃料自給に町民の勤報隊の手で伐り出される。その跡地や角力場にはすでに下深江・下小路の両町内会員が菜園に五反歩を活用すべく、いま老若男女の群が馬鈴薯豆など食料増産の鋤を揮つてゐる(以下略)。

つまり、昭和の戦時期には西山公園内の樹木が防空壕の資材にされたこと、また燃料になっていたこと、そして、その跡地に菜園が設けられたことなどが記されているが、嚮陽溪(西山公園)にも暗

い時代があったのである。

### 三 浮世絵風景画「越州鯖江嚮陽溪真景」について

間部詮勝が拓いた嚮陽溪の景観は浮世絵風景画「越州鯖江嚮陽溪真景」の図によって知ることができる（図一）。この「越州鯖江嚮陽溪真景」の絵画は、初代または二代目歌川広重の作と考えられ、嚮陽溪が開園した安政三年（一八五六）頃の作とされている。<sup>23</sup> すなわち、嚮陽溪開園まもない頃の姿が描かれているわけであるが、「どのようにして、この風景画が出版されたか」ということを考えてみたい。この問題の回答を出すことは、たいへん難しいことではあるが、筆者は、以下のように考える。

浮世絵風景画などの出版にあたっては、版元（出版社）が売れ筋などを考えて、絵師に題材を与えて書かせるのが一般的である。また、これとは別に絵師のほうから自作の作品を版元に売り込むということも十分考えられるのであるが、どちらであっても、版元としては、投資した資本を回収し、さらに利潤を生み出さなければならぬので、どのような絵画（浮世絵）を出版するかは版元にとって重要な問題であった。また、地方を題材とした浮世絵風景画は、お土産品として根強い人気があったことから、こうした作品も多く企画・出版されている。

そこで「越州鯖江嚮陽溪真景」の場合であるが、江戸の版元が、「越前鯖江の嚮陽溪開園の噂を聞きつけ、その浮世絵風景画の出版を企

画し、当時著名だった浮世絵師歌川広重にその制作を依頼した」とみるべきよりも、現時点では他から特別に依頼があつて作られたものと考えられている。それは「越州鯖江嚮陽溪真景」の図中「落款」の部分に「應需」あることからいえることである。「應需」というのは、「要求に応じる」とか「求めに応じて」といった意味があるのであるが、嚮陽溪の絵画を描くことを要求したのは、果たして誰であつたのか、疑問がでてくる。また、改印（検閲印）もないので、売り物用でもなさそうである。この図は通常よりもサイズが大きく、特注品の可能性もあるという。表題も「越州」としている点、つまり、ひろい範囲に配ることを意識して作っている点にも注目しなければならぬとされている。

以上のことから「越州鯖江嚮陽溪真景」は、嚮陽溪の開園を祝い製作されたものではないか、と考えられており、それは、たとえは今日でいう「鯖江をPRする」ためのパンフレット・ポスター・絵葉書などと同様のものとみてよい、と考えたい。普通の浮世絵風景画より大きいことからみて、お菓子・お土産品などの包装紙ではないか、との説もあり有力である。<sup>24</sup>

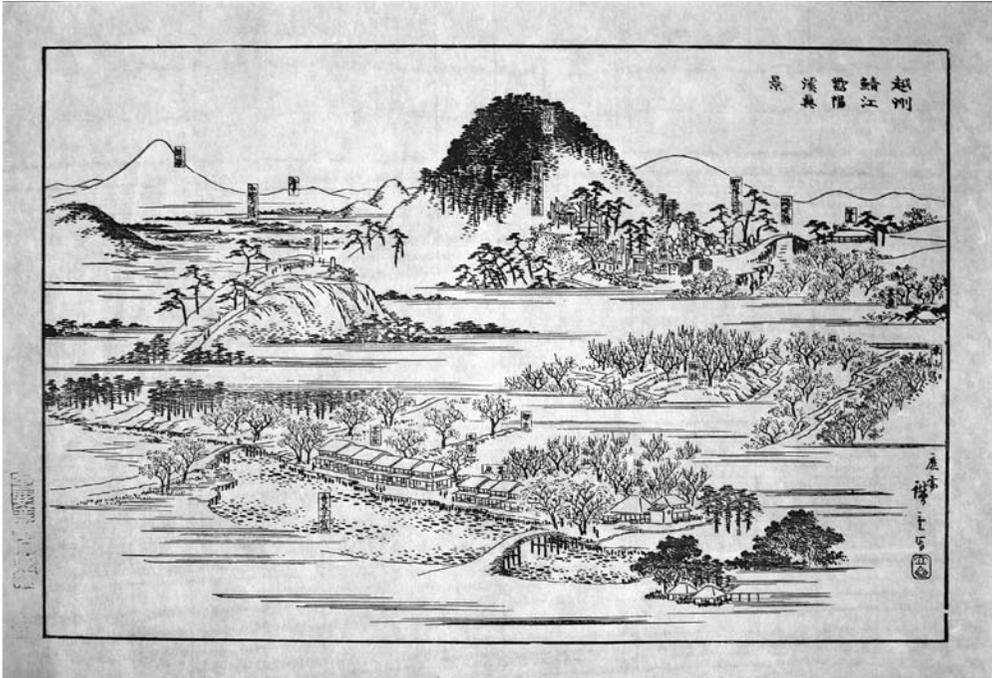
さて、この「越州鯖江嚮陽溪真景」の作は、前述したように初代または二代目歌川広重の作と考えられている。それは、作品の落款に「應需 広重写」・「立斎」とあることからわかることである。しかし初代広重なのか、二代目の広重なのか、実ははっきりしていない。初代と二代目の違いであるが、落款と印章が同じなので、画風とか筆致から判断しなければならない、というたいへんむずかしい

問題がある。しかし、この「越州鯖江嚮陽溪真景」は、画全体の作風（表現）・筆致から考えて、初代歌川広重の作とする説が有力であるが、それでも「越州鯖江嚮陽溪真景」の図が、本当に初代歌川広重の手によって描かれたか、どうか、という問題について考えておく必要がある。

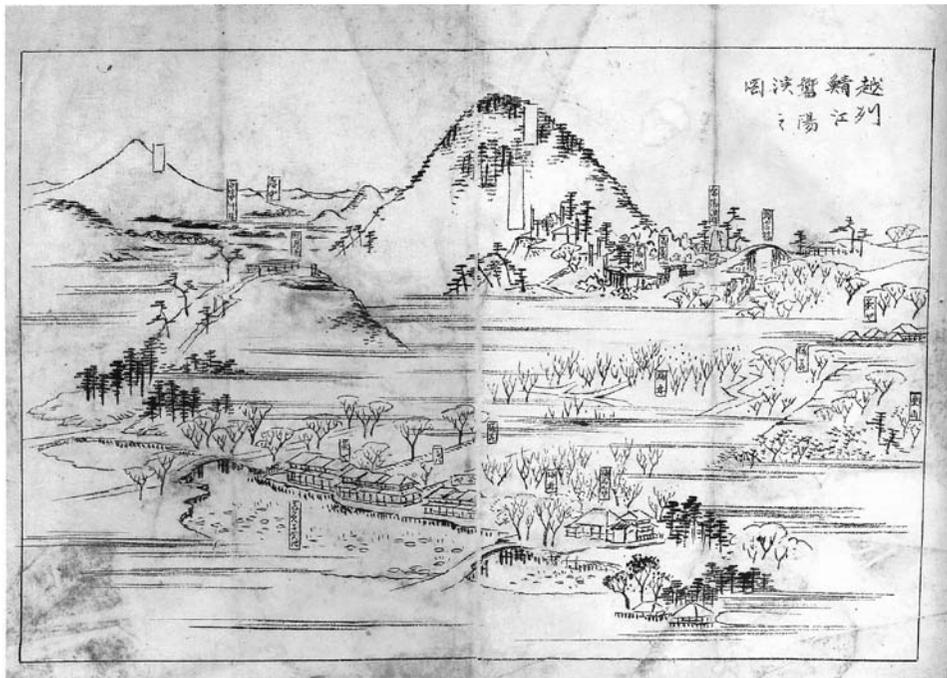
「越州鯖江嚮陽溪真景」画中の題字に「真景」と読むことができる。「真景」とは「実際にみた」、「実際に景色を見て描いた」という意味で、この言葉からみれば、広重が実際に鯖江を訪れてこの絵を描いたという意味になる。しかし、広重は嚮陽溪開園時には六〇歳であったから、高齢といえは、高齢である。その上、当時、広重は「江戸名所百景」という大作に取り組んでおり江戸を離れることは、物理的に無理な状態であった。そして、広重は、嚮陽溪開園後の安政五年（一八五八）九月六日、江戸で流行していたコレラで死亡している（六二歳）。このようにみてみると、この時期、高齢の広重が嚮陽溪開園時に越前国鯖江にやってくることは不可能にちかいことと考えるもので、実際、初代広重が来鯖したという記録は確認されていないが、しかし、初代広重には、越前・若狭を題材、テーマにした作品がいくつか残されていることも事実である。「六十余州名所図絵 越前敦賀気比ノ松原」・「六十余州名所図絵 若狭漁船」・「鱈網」（ともに嘉永六年（一八三五）作）、「山海見立相撲 越前湯ノ尾峠」（安政五年（一八五八）作）といった作品で、広重には、こうした作品があるのであるが、必ずしも越前・若狭にやって来て作品を書いたわけではないとされている。この頃の絵師は、各地の絵を多く残

しているが、実際に旅して描くことはなく、様々な下絵・種本を参考にして、本当の絵は、江戸で制作することが、ほとんどであった。しかし、画稿・種本を得る、といっても、情報の収集など一苦勞であったと考える。広重は実際に嚮陽溪には来ていない（嚮陽溪を見ていない）わけであるから、嚮陽溪に関する情報を入手しなければならぬという問題が生じてくる。それらの情報をどのようにして入手することができたのであろうか。どのような下絵・画稿を得たのであろうか。つまり、嚮陽溪の中央には嚮陽山なる山があり、その東南には玩月峰があり、そこから東方には東山があつて、さらに嚮陽溪の中央には貴美子賀池という大池があり、この池の畔には茶屋があつて梅林や楓、松木などが点在している、嚮陽溪の碑文があり、踏雲橋というすばらしい橋がある、といった情報をどういう方法で入手したのか、考えるべき問題だと思われるのである。

ところで、「越州鯖江嚮陽溪真景」図の下絵・画稿の可能性がある作品が、東京浮世絵太田記念美術館（東京都渋谷区）に所蔵されている（図二）<sup>28</sup>。それが「越州鯖江嚮陽溪之図」と題されているもので、この絵画は、肉筆の絵で、絵を描いた画家名は記されていないが、（初代）広重とされている。本図が広重作であるならば、「越州鯖江嚮陽溪真景」の図も広重作の可能性が高いといえる。「越州鯖江嚮陽溪之図」と「越州鯖江嚮陽溪真景」を比較すると、表題に違いがみられる。つまり、太田記念美術館のものは、表題が「嚮陽溪之図」となっているほか、構図は全く類似していることに注目しなければならぬと考える。画中において中央の嚮陽山や府中の街並みなどの短冊銘



図一「越州鯖江嚮陽溪真景」（鯖江市まなべの館提供）  
近世当初に刷られたものではなく昭和40年代に刷られたものである。



図二「越州鯖江嚮陽溪之図」（「越州鯖江嚮陽溪真景」の画稿か）  
浮世絵太田記念美術館編『歌川広重 肉筆画の世界—天童広重を中心に—』から転載。

〔文字情報〕が記されていないことも、本図が「越州鯖江嚮陽溪真景」の図の画稿（下絵）の可能性があるのであるが、この絵画をどう考えるか、今後専門的に調査が進められることを期待したい。

なお、明治大学図書館（蘆田文庫古地図コレクション）所蔵「越州鯖江嚮陽溪真景」の図は、近世段階に摺られたものである可能性が高い。<sup>27</sup> 近世段階で摺られた「越州鯖江嚮陽溪真景」の絵画は明治大学「蘆田文庫古地図コレクション」所藏品以外は発見されていないことから、たいへん貴重な資料となっている。<sup>28</sup> 蘆田文庫古地図コレクションとは、歴史地理学者である蘆田伊人（一八七七―一九六〇）が遺した文庫である。蘆田伊人は、福井県の出身。明治十年（一八七七）の生まれで、祖父（十左衛門）は福井藩勘定奉行、父（碩）は福井藩藩校明新館教授（後福井県第三師範学校漢学教授）であった。伊人が収集した蘆田文庫の古地図類は、世界全図や日本全図といった広域的なものから、城郭の平面図、寺社境内・名所案内図のようなごく限られた範囲の図などさまざまである。また、その種類も江戸時代の国絵図・村絵図・道中図・鳥瞰図などのほか、明治時代以降の地質図をはじめ各種の主題図が含まれている。江戸時代初期の一七世紀半ばから二〇世紀半ばまで、三百年にわたるものであるが、とくに幕末から昭和初期にかけての、国土が急激に変貌し、地図の作製法、表現法もまた急激に変化していった時期のものが多いことなど、稀有な古地図のコレクションとなり、それ故、この蘆田コレクションに近世段階に摺られた「越州鯖江嚮陽溪真景」の絵画が加えられたのであろう。

## おわりに

「鯖江藩日記」（文久元年十二月二十八日条）に嚮陽溪の絵図を描き、褒錫が与えられたことを示す記事がみられる。文久元年といえば、嚮陽溪が開園してから四・五年後にあたるが、その記録とは

鳥目三百文

村田 辰三郎

嚮陽溪絵図面等仕立骨折候二付、遣之

とある。たいへん短いもので、どのような意味があるのか、いまの段階ではわからないが、要するに、村田辰三郎という家臣が「嚮陽溪の絵図面等を仕立てたので、「鳥目三百文」が与えられた」と記されているのである。

このように、村田は嚮陽溪の絵図面等を仕立てたので褒美として、金子が与えられたわけであるが、その村田について調べてみると、「鯖江藩御家人帳」にその名がでている。安政六年一月段階で、地方物書である。「御家人帳」には絵を書いたとか、絵師であるとか、そういうことは記されていないのである。この村田の仕立てた「嚮陽溪の絵」なるものが、今後発見される可能性は多分ないと思われるが、しかし、どういう絵であったのか、興味が持たれるところである。

## 付記

本稿は、平成二十六年二月一日、鯖江市文化会議新年会講演に基づくものです。講演の機会を与えていただいた鯖江市文化会議の皆さんに感謝申し上げます。

## 註

- (1) 近藤直一の古田郡長・丹生郡長・今立郡長・遠敷郡長在任期間については、野坂訓由「福井県の郡長」(『県史資料』四号)を参照。
- (2) 「看嚮陽溪図有感」の解説は、前川幸雄「嚮陽溪」『嚮陽溪記』及び「看嚮陽溪図有感」の注釈(『鯖江郷土誌懇談会』会誌 一三三号)によった。
- (3) 「庚子の初夏」とは、明治三十三年初夏。青柳柳涯は、旧鯖江藩士青柳宗治のこと。柳涯はその号。
- (4) 「梅塙」は近藤直一の号である。
- (5) 「越州鯖江嚮陽溪真景」の版木がどのようにして作られたか、その経過については、別稿で検討する予定である。
- (6) 『鯖江志』は、天明八年(一七八八)鯖江藩五代藩主間部詮熙の招聘に応じ、京都からきて、藩儒となった芥川元澄(子泉・思堂)により編纂された鯖江に関する地誌書。寛政五年(一七九三)の刊行。『鯖江市史』(別巻)地誌類編などに所収。
- (7) この嚮陽溪の碑文についての解釈などは前掲註(2)参照。
- (8) 孟子「梁惠王章句」(下)に「与民同楽」の語がある。
- (9) 小林宏「徳川吉宗の法と創造」(国学院大学日本文化研究所編『法文化のなかの創造性』創文社)を参照。
- (10) 安見隆雄著「水戸斉昭の「偕楽園記」碑文(水戸の碑文シリーズ五)」(水戸史学会・錦正社)を参照。
- (11) 丹生郡越前町梅浦岡田健彦家文書。福井県文書館撮影文書に拠った。なお、小泉義博「岡田茂十郎日記と『たけふ』」(『武生市史編纂だより』一八号)参照。
- (12) 間部安房守文庫(『待月亭謄筆』巻一六)に掲載。
- (13) 『鯖江市史』(藩政史料編)所収文書。
- (14) 鯖江市本町高田達郎家所蔵「庄屋日記」。
- (15) 鯖江市桜町桑原喬家所蔵「庄屋日記」。
- (16) 鯖江藩主の参勤交代については、拙著「鯖江藩の成立と展開」参照。
- (17) 鯖江市桜町加藤新左衛門家所蔵「庄屋日記」。
- (18) 明治二十五年・二十六年成立の鯖江に関する地誌書(「さむしろ」)に「嚮陽山(一名城ヶ峯、又御建山、俗ニ焼餅山ト云フ)王北ニ在リ、玩月峰(一名西山、又鼠ヶ崎)其西ニ続キ、東山(一名猿ヶ鼻)金比羅山其東ニ連リ(以下略す)」とあるからこの周辺が嚮陽溪の範囲であったと推測する。従って、長泉寺山とは御建山ともいったのである。
- (19) 前掲註(17)の史料。
- (20) 間部詮勝が嚮陽溪の造園にあたり、自ら工事の陣頭にたつたとしている記録として、五代鯖江町長曾我祐利(曾我鶴亭とも、安政元年八月生まれ)の「嚮陽溪記」がある。昭和三十年刊の『鯖江郷土誌』に収録されている。なお前掲註(2)参照。
- (21) 鯖江青年団『団報』は鯖江市まなべの館所蔵。
- (22) 『福井新聞』昭和二十年四月十六日付。本史料は『鯖江市史』第八巻近現代編Ⅱに所収。
- (23) 歌川広重は、江戸末期の浮世絵師。幕府の定火消同心安藤源右衛門の一子。文化六年(一八〇九)一三歳の時、両親を相次いで失い、家督を相続した。ついで間もなく同八年ころ歌川豊国に学ぼうとしたが、門人多数のため断われ、歌川豊広に入門し広重の画号を得た。なお、広重には二代・三代がある。いずれも初代の門人で、このうち二代広重は初名を重宜といい、師の女婿となってその没後二代をついだが、不縁となって、安藤家を去り、のち「喜斎立祥」と改めている。
- (24) これらの点については、鯖江市教育委員会文化課前田清彦氏および鯖江市文化財調査委員会からご教示いただいた。
- (25) 東京浮世絵太田記念美術館編『歌川広重 肉筆画の世界―天童広重を中心に―』所収の絵画による。この画は縦三三・五センチ、横四七・一センチ。

二枚にわたって描かれた画が一枚に貼りあわされている。この絵画に関しては、同館の赤木美智氏、日野原健司氏からご教示をいただいた。

(26) 短冊銘が無記入になっていることは、度々みられるとされる。空欄がみられる場合があるのである。

(27) 「蘆田文庫古地図コレクション」の閲覧では明治大学史資料センターの村松玄太・阿部裕樹両氏のご協力をいただいた。

(28) 明治大学人文科学研究所発行『蘆田文庫目録 古地図編』参照。

(29) 『鯖江市史』第五卷（鯖江藩御家人帳）下巻の村田辰三郎の項参照。